

# 殴り合いの文化史

櫻永 真佐夫著

子どもの頃に1度だけ弟を拳で殴ったことがあり、殴った直後に後悔し、その後悔は今も消えない。なぜ平手打ちにしなかったのかと。

「殴り合い」という言葉を目にした途端、その時の感触を思い出しぞっとした。しかし、平手打ちにはすでに抑制が働いており、子どもには無理だろう。それに比べると拳をふるう行為は突発的で、怒りに任せ、抑えが利かない。

本書は人間の暴力を論じる。とはいえ暴力論は山のようにあり、人間は暴力を順化させ、国家権力に独占させてきたとする大きな話や、言葉の暴力までもひとくくりにする説は物足りない。もっと切羽詰まった暴力を論じたい。だから拳での殴り合いを考えるのだと、著者は宣言する。

出発点がとても身近だ。読者は思わず自分の手を握りしめ、見つめるに違いない。人間は直立二足歩行によって手という最



左右社・30669F

## 身近な出発点から論じる

初の武器を手に入れた。同時にそれは「口の武装解除」であったという具合に、拳から壮大な時空間へとぐいぐい引き込まれる。

動物と異なり人間の暴力は行き過ぎる。しかもそれを娯楽にさえしてきた。だからこそ、人間は暴力を抑え、封じ込めなければならなかった。こうして、その受け皿としてのスポーツが本書の第2のテーマとして登場する。

こう書けばお分かりのとおり、暴力が最も厳しく制御されつつもなお暴力であることをやめないスポーツ、かつては拳闘と呼ばれたボクシングの成り立ちと仕組みが縦横無尽に語られる。

ボクシングは拳で殴り合うという点で極めて人間的であり、闘争の模倣であるが故に文化であり、暴力を嫌うが故にルールが厳格化された点で理性的であるという主張は、ボクシングと聞いて眉をひそめる読者をも納得させるに違いない。

著者自身もボクサーとしてリングに立つだけに、ボクシングに対する愛があふれている。

(木下直之・静岡県立美術館館長)

かしなが・まさお 1971年兵庫県生まれ。国立民族学博物館教授。専門は文化人類学。著書に「黒タイ歌謡」など。